

# U DERBY TODAY

2026 April 25

2021年以来となるミクニワールドスタジアム北九州（北九州市小倉北区）での「関門海峡ダービー」が4月25日に行われる。関門海峡を挟んで九州側の北九州市をホームタウンとするギラヴァンツ北九州と、山口県の全市町をホームタウンとするレノファ山口FC。前回対戦で北九州側が手にした「関門海峡ダービーWINNERフラッグ」を懸けた一戦となる。

明治安田J2・J3百年構想リーグの地域リーグラウンド（各チーム18試合）は12戦目を迎える。WEST-Bの山口と北九州は前半戦で苦戦する試合があったものの、次第に調子を上げてきている。



## 2連勝中の山口 質の高い攻撃で複数得点

山口は2節前に大分、前節は鹿児島とプレースタイルが異なるチームにいずれも逆転で勝利した。得失点差はプラス1に転じ、順位もトップハーフの4位。相手に応じて柔軟に戦い方を変え、逆転勝ちまで持ち込んでいるのも山口の充実ぶりを示す。目下2連勝中と好調を維持して、今回のダービーを含む大型連休の5連戦に入る。

キャプテンの輪笠祐士が「他のチームより選手層が厚いとは思っているのも、もっと自分たちに自信を付けられる連戦にしていきたい」と話すように、山口はリーグ屈指の顔ぶれを揃える。さらに出遅れていた選手が復帰してきたことに加え、今季から指揮を執る小田切道治監督が植え付ける戦術の浸透も相まって戦績は安定してきた。

基本的なフォーメーションは3-4-2-1としているが、攻撃時の流動性は高い。特に図上ではセンターではなくサイド寄りにマークが置かれる選手、すなわち田邊光平や大岩一貴、小澤亮太などの関わり方は相手にとって嫌らしく、攻撃を分厚いものにする。ノッキングしてもなお、輪笠や中島賢星がボールを引き出して攻撃を続けられるのは、山口の持つ質の高さを証明する。

フィニッシュシーンでは前節で2得点を挙げた古川大悟と下関市出身の藤岡浩介がゴールに迫る。彼らに加え、山口

の育成組織からトップ入りした3年目の末永透瑛、萩市出身で高川学園などを経てプロ入りした山本駿亮などが持ち味を出す。質の高い攻撃の最後を飾る顔ぶれも多彩だ。

## 調子を上げる北九州 攻めの3バックに光明

その山口を迎え撃つ北九州は前節の琉球戦を2-0で快勝し、最下位を脱した。開幕から6連敗していた北九州だったが、山口との前回対戦（3月22日）で4-2-3-1のフォーメーションを3-4-2-1に変更して今季初勝利を奪取。その後は手堅い戦いで勝ち点を積み上げている。2節前は鳥栖に0-1で敗れたが、シュート18本を浴びる猛攻を守備の粘り強さで抗い、1失点にとどめた。

北九州は今季、守備陣のほとんどが入れ替わったことでボックス周辺の共通理解醸成に時間が掛かった。ハイプレスの旗を振る前線の顔ぶれも安定せず、ハイインテンシティー（高強度）とハイポゼッションの再浸透は道半ばだ。ただ、北九州で3年目の増本浩平監督は前回のダービー後、次のようにシステム変更の一端を明かし、選手の特性に寄り添いながら基盤作りを進める。

「（最終ラインが）3枚のチームから来てくれた選手が多い。4枚にアジャストするために努力してくれていて理解も進んでいるが、一つでも不安を取り除いてあげることで自信を持って試合に臨めるのなら、そうすべきだと思う。単純に（フィールド幅の）68メートルを4人で守るのか3人で守るのかだと3人のほうが難しいが、なるべく5枚にはせず、（後ろに重心を下げずに）前に出て行くことは選手たちも理解してやってくれている」

後ろを重くせずに前に行くという姿勢は、左ウイングバックでプレーする19歳の吉原楓人、前節で1ゴール1アシストと結果を出したシャドーの平原隆暉を見ると分かりやすく、矢印が前に向いていることをプレーで示す。

さらに、前回のダービーでシャドーでハイプレスを掛け、現在はボランチにポジションを移している岡野凜平も試合のキーマンだ。北九州のチームスタイルを表現する岡野は「一列前のシャドーの気持ちも分かるし、前をプレーする選

手がボランチに求めているものも分かる。チームが求めているものを体現できるようにハードな練習を積んでいきたい」と語り、感覚を研ぎ澄まして攻守のタクトを振る。

## 同窓対決やセットプレーに注目

両チームとも基本的なフォーメーションは3-4-2-1だが、純粋な「ミラーゲーム」とは言いがたい。山口のほうが流動性が高く、前線が2トップ気味にポジションを取ることもあるからだ。いわゆるハーフバック（3バックの左右）の攻撃参加にも違いはある。それでも、選手の個性がぶつかり合うシーンは試合をより魅力的なものにしてくれそうだ。

前回のダービーで山口のボールホルダーに厳しくアプローチした岡野に視点を合わせると、ピッチ上では山口の藤岡や輪笠がいかに岡野からのプレッシャーをはがして前進させられるかが見どころとなる。プレースタイルでは中島、野寄和哉などに重なる部分もある。名前を挙げた選手たちが戦う中盤は球際の攻防が必ずヒートアップする。

2020年の高校選手権で高川学園戦を含む4試合で先発した小澤亮太（当時3年、現山口）と平原隆暉（当時2年、現北九州）の昌平高の同窓対決にも注目だ。

小澤は「中盤で細かいタッチが得意な選手。やられないように戦いたい」と後輩を評し、平原も「高校の時はサイドからドリブルで駆け上がっていく選手で、守備の強度も相当に高い」と先輩を警戒する。両選手とも前節の試合でスタメンに選ばれ、小澤は右ウイングバックで運動量豊富に相手に対峙し、平原は1ゴール1アシストと活躍。平原は「マッチアップすることもあると思う。一緒に対戦できるのが楽しみ」

と語る。

試合全体を眺めれば、個の力に勝る山口の出来に懸かるところが大きい。前回対戦では山口のボール保持がままならず、北九州のプレッシングに対して後手に回った。今回も山口が気圧される展開となると前回の繰り返しとなり、それをいなして前線に起点を築ければ山口が優位にゲームを運ぶ。

ただ、試合を動かすのがセットプレーになる可能性もある。北九州は前節の琉球戦でプレスが効いて流れの中からの得点につなげたが、今季はセットプレーからの得点のほうが多い。前回のダービーも右のコーナーキックの流れから岡野が巧みな足さばきでゴールを決めている。

逆に山口はセットプレーからの失点が半数を占める。小田切監督は「甘さがある。その状況でも勝っているが、修正しながら勝てるようにしていきたい」と話しており、修正を急ぐ。セットプレーに強みがある北九州とそれが明確なウィークポイントだと言える山口の対戦は、特に山口にとって試金石となる。

Jリーグ主催公式戦での通算対戦成績は、3勝1分3敗と拮抗する（通常のリーグ戦に限れば北九州から見て2勝1分3敗）。前回のミクスタでのダービーは新型コロナウイルスの流行下で行われたこともあり、両チームの声援がミクスタに響くのは初めて。

北九州がダービー2連勝を飾るか、山口がフラッグ奪還の勝利を手にするか――。関門海峡が間近に迫るスタジアムでのダービーで、両軍が上昇を確かなものとする勝利を目指す。キックオフは25日午後2時。



17  
田邊光平

ウイングバックに定着。ゴール前の質が上がり、5節鳥栖戦で初得点。立ち位置でも優位性を出す。髪型でイメチェン。

## レノファ山口FC

vs.鹿児島(2-1)

前節の試合布陣

vs.琉球(2-0)



3-4-2-1

監督 小田切 道治

増本 浩平 監督

3-4-2-1



17  
岡野凜平

ハイプレスの要。4月からボランチで先発して攻守で存在感。前回のダービーではフラッグを掲げる。持ちネタは卑呼び。